
魔法少女リリカルなのは～白銀の翼～

マルチョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜白銀の翼〜

【Nコード】

N0848Z

【作者名】

マルチヨン

【あらすじ】

何も変わらない日常が好きだ。
理解出来ない非日常が嫌いだ。

ある日見つけた銀に輝く指輪、その出会いが今まで見ていた世界を変えてしまった。

飛び交う魔法弾、空を翔ける少女達。

ああ面倒だな……

魔法少女リリカルなのは〜白銀の翼〜

はじまります

第1話 非日常への扉

一般より少し大きく豪華な一軒家。ここら一帯にはありふれた家だ、
だが一つだけ決定的に他と違う所があるそれは……

「よいしょつと」

本が敷き詰められたダンボールを持ち上げる、中の本は僕には到底
理解出来ない数式やら専門用語が書き詰められている。そのダンボ
ールを玄関に運ぶ、僕一人では重くて重労働だが、生憎僕には手伝
ってもらえる人が居ない。

「これで最後つと……」

5個のダンボールを運び終え一息ついてまた、書斎に戻った。

この家は3階建ての一軒家で、現在小学3年生の僕一人で管理して
いる。

何故こんな事になったかというと、消えた……そう親が行方不明に
なったのだ。よく聞かされてないので余り詳しい事は知らないのだ
が、何かの事件に巻き込まれて消息をたったらしい。

そして残された僕は、最初は施設に入れられるはずだったのだけれ
ど、それを断った。ただ迷惑をかけたく無かったのだが、勿論の事
ながら当時は小学1年生認められるはずも無く、そのまま施設にあ
ずけられる時に、しかしユリナシユガーノフという女性が僕を引
き取ってくれた。

何でも両親の仕事仲間だったらしく、僕を引き取る事にしたらしい、
最初の段階ではこの人の家で過ごす予定だったのだが、仕事柄世界

各地を転々としなさいといけならしく、日本に僕一人で暮らしている。

今でも月に一回の定期連絡の手紙のやり取りだけはしている。

「ん？何この本？」

ユリナさんから昔父が使っていた書齋の本を送ってくれと手紙が来たので、書齋の整理をしていたのだが、今まで僕が片付けた本とは明らかに違う本が一冊だけあった。

題名は”魔導士の心得” 今までの本は僕の知らない文字で書かれていたり日本語で書かれている本は無かった。興味を惹かれその本を手に取る。

「あれ？」

ペラペラとページを捲っていくが、行けども行けども空白だけでも書かれていなかった。油文字かとも疑ったが、そこまでして見たい訳でも無かったので元の位置にしまった。

カチ

すると何かはまった様な音がした。しばらく本棚を見ていたが何も起こらない、恐る恐る本棚に触れてみると少しだけ横に動いた。そのまま本棚をスライドし切るとそこには下に非常用扉の様な扉があった。

その扉は上に引くタイプのようなので引いて開くと、ギギギと金属の擦れる音と共にすんなり開いた。そこには下に降りるハシゴがあった。

「こんな事ってあるんだ……」

少しだけ冒険気分でハシゴを降りる。少し降りると地面に足が着く。そしてすぐドアがあった、しかし僕が何時も開ける様なドアでは無く少し近未来感が漂うドアだ。何よりドアのノブが無い。どうやって開けるのかと近づくと、映画に出てくるSFの宇宙船のドアの様にプシューと空気音と共にスライドして開いた。

「え？」

どんな物があるのかと期待したのだが、あつたのは8畳程の部屋にポツンと机が一つ、その上に指輪を入れるような箱が置かれているだけ。

内心ゲンナリしながらその箱を手に取り開けてみると銀に輝く指輪が入っていた。何気なく右手の薬指にはめてみると……何とピツタリ。

指輪を見ると、裏にNumina custosと刻まれていた。

「又ミイナクウストス？どういう意味だろ？」

指輪をはめたまま上に戻り、残りの本を詰め込み終え、指輪の事もふまえつつ今回の苦勞を嫌味ったらしく手紙に書き込んで宅急便で送った。

今ユリナさんはロシアに居るらしい…何時も寒いと愚痴ってくる。

「はー疲れた、寝よ」

重い身体を引きずりながら2階の自室に戻ってそのままベットに倒れ込んだ。襲いかかる睡魔に抗う事もせずそのまま眠りについた。

第1話 非日常への扉（後書き）

どうもまるちゃんです

まず1話呼んで頂きありがとうございます

何分初心者なものですから、暖かい目で見守って頂けると幸いです

誤字脱字などがありましたら、ご報告頂けると幸いです

不規則更新になりますが、どうぞ今後ともよろしくお願い致します

第2話 夜の来訪者（前書き）

この世界の住人ではない存在

招かれざる物と共にやってきた者

そして力無き少女が出会う時

運命の歯車が回りだす

しかし平穩を望む少年もまた巻き込まれていく

魔法少女リリカルなのは～白銀の翼～

はじまります

第2話 夜の来訪者

「ふあ〜」

眠たい…僕は一刻も早く家に帰って寝たかった。別に昨日夜遅くまで起きていたとかじゃ無くただ単に3時から4時にかけて眠くなってしまうのだ。

只今の時刻2時56分……正直に言って今すぐ寝たい、道路でも良いから寝たい。

何時もはもう少し早く帰れるのだが、間の悪い事に六時間授業+掃除当番だったのでこんな死活問題級に遅くなってしまった。

家までまだまだ距離はある、しかし眠い…我慢は出来ない。よし寝よう。

ということであち向かう道を少し変更して近くの公園に向かった。公園に着くとお姉さんが犬を連れて散歩してたり、何か見たことある三人組の女子がいたり人目があつたのでベンチで寝ずに、木の上で寝ることにした。

「少しだけ……zzz」

「うう……ふあ〜」

目を覚ますと……夜だった。うん見間違ひじゃ無く夜空が広がっていた。

とりあえず帰ろうと木から降りる。

帰ろうと歩き出すと向こうから何だか見たことのある栗色ツインテールが走ってきた。

まあ僕には関係ないだろうとそのまま歩いていく。

「あれ？優香ちゃん？」

僕の事何て覚えていないだろうと高を括っていたのだが予想とは裏腹に話しかけられた。

「どうしたのこんな夜遅くに？」

「その言葉そっくりそのままお返しいたします」

余り関わると面倒な事になりそうな気がしたのでさっさと退散させてもらう。

そう思つて歩き出そうとすると、足元にフェレットみたいな動物が近寄ってきた。

「何これ？」

そのフェレットを掴みあげ観察してみると変だった。獣臭くない、これはおかしい、どう頑張っても少しは獣臭さは抜けない物だ。

「これ高町さんの？」

「う、うん」

「はい、早く帰りなよ」

触らぬ神に祟なし。関わらない方が利口だろう。フェレットを高町さんに返し帰ろうと歩く。

「待つて下さい」

僕を呼び止める声、だが高町さんの声では無い…少年の声。
今此処にいるのは僕と高町さんとフェレット。考えるまでも無かつたが非現実的すぎる。

確認のために振り向くと、フェレットを見ながらオロオロしている高町さんとこちらを見続けているフェレット。

「貴方その指輪どこで手に入れたんですか」

「フェレットが喋ってる……」

指輪：そう僕の指には昨日見つけた銀の指輪がはまっている。朝目が覚めて抜こうと頑張ったのだが、中々外れず断念した。

フェレット喋れたっけ……そんな馬鹿なインコじゃあるまいし。

「何で君みたいな、僕の現実に現在進行形で喧嘩売ってくれているような、摩訶不思議な動物にそんな事言わないといけないの？」

「う…そんな事はどうでも良いんです。何故貴方がNumina custosを持っていらっしゃるんですか!!」

「っ!!」

Numina custosそれはこの指輪に刻まれていた名前。

「何を知っているんだい？」

「それは、僕達の部族長が昔遺跡で見つけた物だ。管理局に渡したはず」

僕には理解出来ない単語が出て来たが、管理局らしき所に保管されているであろう指輪が僕の家、しかも父親の書斎の地下室から出てきたと。

「とりあえず分らない事だらけだ、詳しく話してくれるかい？そこで話について行けず阿呆顔晒している高町さんの事も」

「えええ！！」

「ああ、分かったよ話そう」

そんなわけで3人で現状確認と僕への説明をしたんだけど……うん訳が分らないね。

「魔法ね…魔法か。全世界の科学者に謝ったら？」

「い、いや、そんな事言われても」

説明は受けた、横で頭から煙だしてる高町さん（馬鹿）が魔法使いもとい魔法少女らしい。そして僕が見つけた Numina custers は何かアルハザードなる場所に関係した遺跡から見つかったらしい。

しかも何かこの指輪文献によると資質がある人間にしか付けられず、最悪な事に力が目覚めるまで外れないと……面倒な事に巻き込まれたようだ。

「で…僕もその馬鹿（高町さん）と同じく魔法使いにならないと、

この指輪外れないんだよね

「うん、その」

「待って！優香ちゃんさつきから、私の事何か変な意味で思ったり言ったりしてない？」

フェレットがして欲しくないが肯定しようとしたときに、高町さんが割り込んできた。

「被害妄想激しすぎだよ、現実見なよ」

「あはははは」

「う……じゃあ私の事はなのはって呼んで、ユーノ君も」

「面倒だ。じゃ僕は帰るよ……魔法の事は気がむいたら高町さんに言うから」

結構な時間話していたので、お腹が空いたし、早く帰りたいので家に向かって歩く。後ろで高町さんが何か言ってるが無視してそのまま家に帰った。

「あ……フェレットの名前聞いてない。まあ良いか」

第2話 夜の来訪者（後書き）

どうもマルチヨンです

主人公が魔法に関わるきっかけ…なのかな？

なのはの扱いがモブですねwww

主人公の初期設定に毒舌は無かったはずなんだが……（汗

誤字脱字がありましたらコメでよろしくお願いします

デワデワまた今度！

第3話 運命と少女

なのは Side

月夜優香ちゃん、あまりお話した事無い子、でも印象に残っていた。最初は何で男の子の制服着てるのかと疑問に思った、それぐらい可愛かった。

腰辺りまで伸びた艶がある髪にクリクリした綺麗な瞳 私より可愛い。

でもこの前ユーノ君に出会って魔法に触れた日、いけない事だけど逃げた先の公園に優香ちゃんはいた。

帰ろうとする優香ちゃんに話しかけちゃったユーノ君、私は慌てちゃったけど優香ちゃんは余り驚いた様子も無くユーノ君とお話してそして一緒に魔法の事を聞いて すぐに帰っていった。

後でユーノ君が簡単に説明してくれたけど 優香ちゃんが持っていた指輪が何か大事な物らしい。

「どうしたのなの？」

「ふえ」

私が考え事してたら女の子二人が心配そうな顔でこっちを見ていた。

「なのは何か最近上の空よ」

「そうだよ、何か悩み事なら相談にのるよ？」

この二人はアリサーバニングスちゃんと月村すずかちゃん。とある事をきっかけに仲良くなった私のお友達です。

「にやははは、大丈夫だよ」

「そう……でも何かあったらすぐに言いなさいよ」

何かと私の事を心配してくれる優しいお友達。

「あ、そうだ今度私のお家でお茶会しない？」

「すずかちゃんのお家で？」

「いいわね、そうしましょう」

「あれ、どこ行くの？」

すずかちゃんの家に来て皆でお茶会をしていると、ジュエルシードが発動してしまっただみなの。それで勝手に出歩くと怪しまれるので、ユーノ君に先に行ってもらった事にしたの。

「ちょっと追いかけて来るね」

「うん、行ってらっしゃい」

「なのはコケないようにね」

「もうアリサちゃんたら……」

そしてユーノ君を追って森の中へ。
ジュエルシードの発動場所には着いたのは良いんだけど

「にやーにやー」

「おつきいネコ？」

「多分おつきくなりたいてって願いを、ただ大きくなるに歪んで叶えられたんじゃないかな……」

目の前には私より大きなネコさんが一匹。

攻撃するのは嫌だけどジュエルシードは集めないといけないから、ごめんねネコさん。

「レイジングハートセットアップ」

「Stand by Ready」

ユーノ君から貰った私の相棒、赤いビー玉見たいな宝石で私に力を貸してくれる頼もしい相棒。

「Set up」

私がイメージしたバリアジャケットと杖に変わった。

バリアジャケットはすぐにイメージしやすかった何時も着ている？
私立聖祥大学付属小学校の制服をイメージした物で、杖は…これぞ魔法少女の杖かな。

「なのはジュエルシードの封印お願い」

「うん分かった……え」

「にゃーーーーー」

私がジュエルシード封印に取り掛かろうとした時に何か飛んできてネコさんに当たった。

その何か飛んできた方向を見ると、女の子が居た。

「フォトンランサー連撃」

「Photon lancer Full auto fire」

黄色い魔法が連射されてネコさんに当たった。

そのままネコさんは気絶したみたいで倒れちゃった。

「魔法の光まさか……」

私がネコさんを見ている間に女の子はすぐ近くの木の枝に立っていた。

金色の髪に赤い瞳、綺麗な娘……何か私の周りには私より綺麗な娘が多いような気が……ダメダメ今それを考えちゃいけない気がする。

その子は黒いスクール水着？みたいなのにマントとスカートだけ……

……あれが痴女なのかな？

「バルディッシュと同じインテリジェントデバイス……ジュエルシードの探索者か」

謎の痴女さんは何を思ったのか私に攻撃してきました。

「Flier fin」

急な事に動けなかった私の代わりにレイジングハートが魔法を発動してくれて、何とか空中に逃げ、謎の痴女さんの攻撃はよけれました。

「っは」

謎の痴女さんは私が空に上がって気がつくのと地上には居なくて、私に向かって鎌の様な魔法の杖を振り下ろしてきた。

レイジングハートで防いだけど、一撃が重くて腕が痺れて今にも弾き飛ばされそうです。

「な、何でこんな事するの…」

「……」

謎の痴女さんは何も言わずそのまま力を加えてきました。

もうこれ以上は耐えられないので、そのまま加えられてる力に逆らわずに後ろに引きました。

「Device form」

「Shooting mode」

二人のデバイスが近距離攻撃用から砲撃用に変形させて、お互いに構えました。

「っにゃー」

その時ネコさんが起きたみたいです。
そして私はネコさんの方を見てしまった

「Photon Lancer Get set」

緊張状態だったのにも関わらず、私が目を離した瞬間、謎の痴女さんの杖から砲撃が放たれました。

なのは Side End

ユイノ Side

「なのは!」

敵の子の砲撃を食らって落ちてくるなのは。
このまま落ちたら怪我なんかじゃすまない、そう思ってなのはの落下地点まで走った。

「っふ」

なのはのおかげで回復した魔力でクッションを作る。
何とか間に合いなのはに落下による怪我はなさそうだ。
そうこうしてる内に敵の子はジュエルシードを封印していた。
封印し終わってこちらをジッと見てきた。
もしやなのはにトドメを刺そうとしてるのかと身体を強ばらせるが、
少し見て何もせずに戻っていった。

「よ、良かった……」

緊張から解けたのか力が抜けその場へたりこんでしまった。

「そつだはのは！」

すぐになのはの状態を確認すると、怪我はそれ程ないようなので、助けを呼びに屋敷まで走った。

第3話 運命と少女（後書き）

どうもマルチヨンです

あれ…… 主人公は…居ないな

もし主人公だけに視点を置いてみると数話で無印終わってしまう…
…影薄い子なんです

なので今回はなのはさんに頑張ってもらいました

初めての戦闘シーンだったので結構訳が分らないと思います

なのはさん……フェイトの事痴女って…

デバイスはデバイスで何勝手に英語表記してんの…俺死んじやうよ

はーもう既に勝手にキャラが動き出したこの小説ですが、お見苦しい所も出てきそうですがよろしく願います

誤字脱字のご報告願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0848z/>

魔法少女リリカルなのは～白銀の翼～

2011年12月8日01時47分発行